

2020年度 ESD推進ダイアログ



United Nations
Educational, Scientific and
Cultural Organization



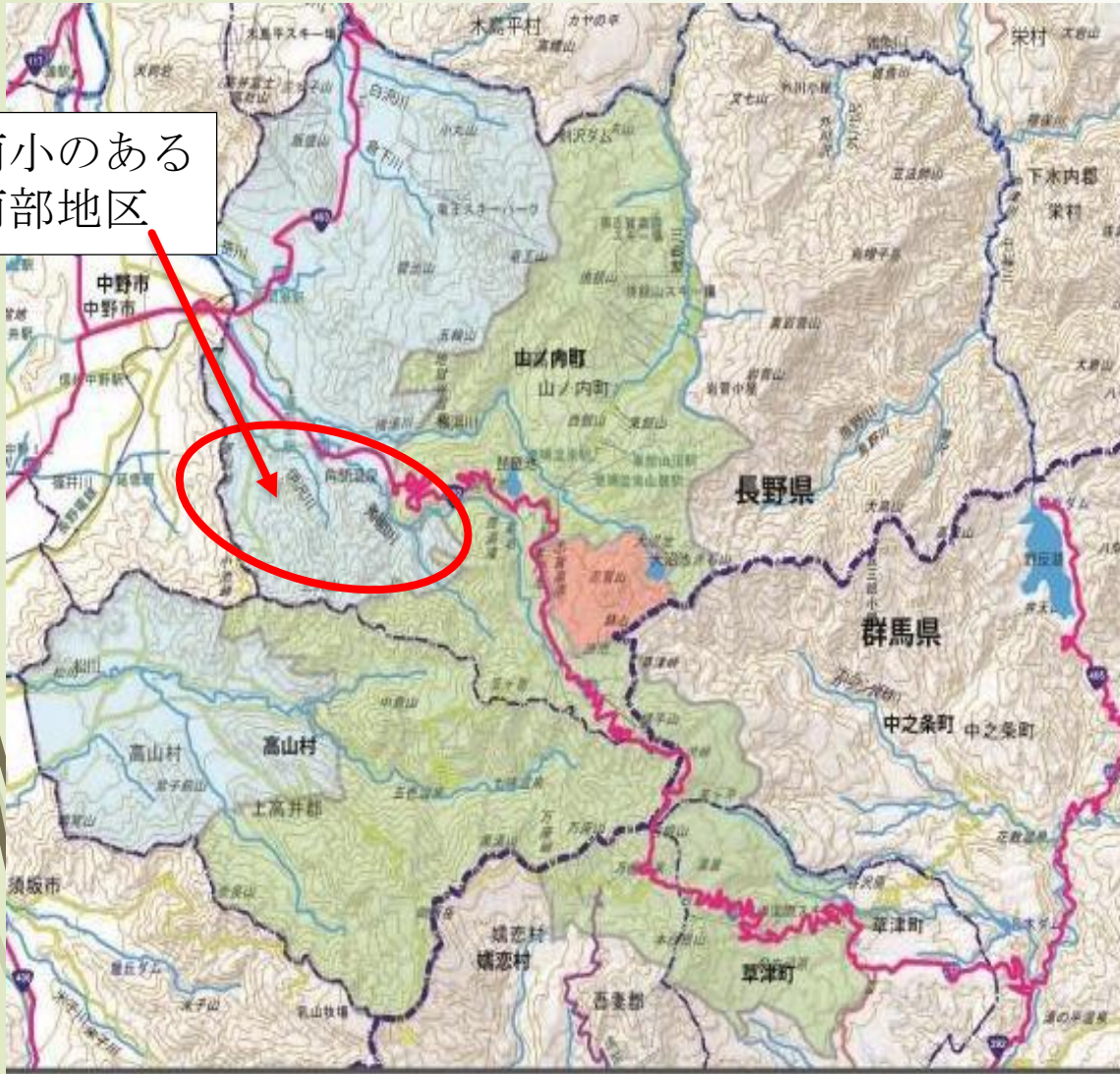
Member of
UNESCO
Associated
Schools

学校と子どもと地域とで進めるESDを目指して

長野県下高井郡山ノ内町立南小学校
ESD推進担当（1年担任） 菅原 勇介

学校について（山ノ内町の南部地区）

南小のある
南部地区



核心地域 約 700ha
緩衝地域 約 17,600ha
移行地域 約 12,000ha



全校児童 全学年単級で全校86名の小規模校
子どもたちが住んでいる地区

- ・町内3小学校と1中学校 すべてユネスコスクール
- ・ユネスコエコパーク（BR）内の移行地域に居住
- ・りんごを中心とした果樹栽培（ぶどうなども盛ん）
- ・角間温泉、穂波温泉などの温泉場
（角間温泉はかつて湯治場として栄えた）
- ・佐野遺跡、佐野神社、獄心荘（横山大観の別荘）などの史跡
- ・佐久間象山とのかかわり
- ・急激に進む少子高齢化

・学校の重点

感じ・考え・聴き合う子ども・・・話し，聴き合う授業づくり

笑顔いっぱいやさしい子ども・・・互いに認め励まし合う学級づくり

粘り強く・たくましい子ども・・・体験活動や運動・遊びを通し，心身を鍛える

聴くこと ～自分を拓き相手を尊重する～

・全校研究テーマ

素直に思いをかわし合う教師と子ども

多様性の尊重

ESD

代替思考力

～ズレから生まれる問題，**批判的思考力**を手がかりに～

・研究・研修の体制づくり

低学年グループ・高学年グループの2グループの体制で日々の悩みや実践を語り合う形で研究を進める。ESDを中心に据え，研究と研修を一体のものととらえていく。

・ESDの学校テーマ

つなぎたい わたしたちの町の もの・ひと・こと

合言葉 E：いいこと S：すすんで D：できるかな

昨年度の各学年の活動から



1年生 収穫物で他学年と交流



2年生 りんごを育てて販売



3年生 大根を使って健康に



4年生 組木を作ってプレゼント



5年生 共同浴場の魅力は何？



6年生 堤防沿いで車いすはどう？

これまでの様子から ～ESD？難しそう・・・～

ユネスコスクールの使命・・・「国内のESD推進の拠点となる」こと。

「ESDを進めなくちゃいけない」という**義務感**

「年次報告書って書かなくちゃいけないの」などの**トップダウンに対する抵抗感**

「成果発表会とかあるの」という**負担感・やらされ感**

「コンソーシアム，マルチステークホルダー，ダイバーシティ，SDGs，ESD，サステナビリティ・・・」「カタカナばかりでさっぱり」という**不安感・別の世界感**

新しいことは始めるの。忙しいのに」という**多忙感・負担感**（この部分については，当時は学校としてユネスコスクールへの登録を切望したのではなく，山ノ内町として全学校が申請するという形だったために感じたことかもしれない。）

とにかく，職員の中には「**難しそう**」「できれば自分が担当になりたくはないな」という雰囲気があったかと思います。それは，教職員が持続不可能に感じ，仕方がないことのようにも感じます。

これまでの様子から ～やってみると面白い 子どもたちも、いきいきと 学習に向かっていく事実～

- ・ アマランサスを使ったおやきづくり 町への提案（5, 6年）
- ・ 高齢者が元気に暮らす町づくり～楽ちんバス（コミュニティバス）の運行時刻と料金に着目して～（6年）
- ・ 大豆を育て加工して見つめる食事・農業・貿易 大豆の可能性（4年）
- ・ 地域の温泉を見つめ直して考える, 山ノ内町（5年）
- ・ 地域の人が集まる夜間瀬川の実現に向けて（6年）などなど

ESDを前向きにとらえてみると・・・

山ノ内南小学校のESDのとらえ方を前のページのようなものから、前向きなものへと変化させたい！

いいこと すすんで できる子

ESDを通して目指す子ども象

- ・ 自分を含めた「ひと」のよさを見る子ども
- ・ 「本当か」と問い直す子ども
- ・ 身の回りの「もの」「社会」のよさや課題を発見する子ども
- ・ 身の回りの社会や世界の課題に対して、その解決に向けて主体的に学び、当事者としてかかわる子ども

ESDとは、

- ① これまでの教育・学習活動のとらえ直し
- ② 教科・領域間のつながりや関係性の見つめ直し
- ③ 身の周りの社会のもつ魅力や課題の再発見

→ **これらを楽しむ**

本校の教職員のチームとしてのミッション

低学年のESDの考え方（私たちの悩み）

キーワード：豊かな原体験

高学年になれば，社会的事象とつなげて考えたり，体験と課題解決とをつなげていくことができると思うけれども，低学年の子どもたちの発達段階では，どう考えたらいいのだろうか？

「低学年のESD
推進はどのように
考えたらよい
のか？」

様々な学校の取り組みを見に行ったり，研修に参加すると，実践事例としてあがるのは，高学年のものばかりに感じる。低学年の発達段階等も考えるとどうしたらよいかわかる。

2018年度の信州ESDコンソーシアムの研修の際に，及川幸彦先生の質問をすると・・・



「考えることがおもしろい」ということを大切にという話があった。

ACCUで2020年2月28日に発表した「変容につながる16のアプローチ」では，低学年で大事にしたいこととして，「**安心感に包まれた豊かな原体験の積み重ね**」ということが示されていた。

原体験とは

自分の五感を使った体験のこと。実際に見る，触る，聴く，嗅ぐなどを保障する体験。

今年度の各学年の活動

テーマは共通して「水」



1年生 庭に生き物を増やしたい



2年生 生き物となかよし



3年生 学校でもそばをまきたい



4年生 大豆で健康up!!



5年生 雪白舞をつくろう



6年生 海なし県での海洋学習

最近のできごとから

1年生 ヨーグルトって作れるの！？
近くの牧場に牛さんを見に行こう



牛さんってこんなに大きいの！

初めて触ってみたよ。牛乳の味が違う！

またみんなで牛さんに会いに行きたいな。

チーズやヨーグルトの作り方を教えてほしいな。

子どもたちが体験を通して、「つくる」面白さや難しさを味わうのではないか。牛とかかわる人との出会いも期待できる。後々、食の安全、消費者教育など様々なことにつながるだろう。

買い物袋がごみとして多いことに課題意識を持った子どもたち。体験と社会の現実から課題を把握し、解決に向けて身近なところでできることをしようと動き出した。地域の店でも使えないかなど、保護者の方も動き出す！



6年生 「2年生のりんご販売の時って、買い物袋をかなり使うんだよね・・・」

新聞紙でエコバックをつくろう

2年生の先生に紹介しにいこう

もっと耐久性をあげなくちゃ

2年生にも作り方を教えよう

保護者の方も協力してくれるって

ESD体験学習（2016年～）

志賀高原BR内を歩く

地域に触れる



1・2年 地獄谷野猿公苑など



1・2年生 地域の公園で遊ぶ



3・4年生 勾玉の丘



3・4年生 自然探勝コース



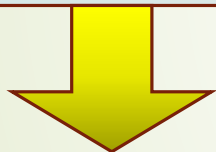
5・6年生 峠の三十三観音巡り



5・6年生 笠ヶ岳登山（校歌）

今年度の研究と研修の進め方①

- 月曜日の放課後に研究会をもつ。
 - ・ 30分程度で、勤務時間を絶対に超えないようにする。
 - ・ グループで日程を早めに出し、実践発表会の形式で行う。
 - ・ 水谷先生にも昨年からこれに可能な範囲で参加してもらい、日常的に学校に来てもらう。
 - ・ 共通の記録用紙に記録し、PDF化し共有ができるようにする。



このような形にしてみても・・・

- ・ 日常の学級の様子を語り合うことが主なので負担感が軽減された。
- ・ これまでより職員同士が考えていることや、他の学級の様子について理解できた。
→他学年の子どもと学習のことについて、話すようになった。
- ・ 職員同士でこれまでの経験などを基に提案し合うような状況が生まれた。

今年度の研究と研修の進め方②

○ ESD研修

- ① 4月 今年度の研究・研修の進め方の共有（変容につながる16のアプローチを読む）
- ② 4月 今年度の学習展開についての検討（信州大学の渡辺隆一先生と）
- ③ 4月 今年度の自己課題の共有
- ④ 6月 ESDカレンダーの作成・見直し（信州大学の水谷瑞希先生と）
- ⑤ 8月 2学期以降の展開についての検討（県教委の指導主事と）
- ⑥ 12月 校内研究会（県教委指導主事）
- ⑦ 12月 全学級の実践発表会を予定（外部講師を依頼予定）
今年度の実践報告の作成を開始

研修で心がけたこと

全員が参加している，自分が研修の場を作っている一人であることを感じるようにしたい。

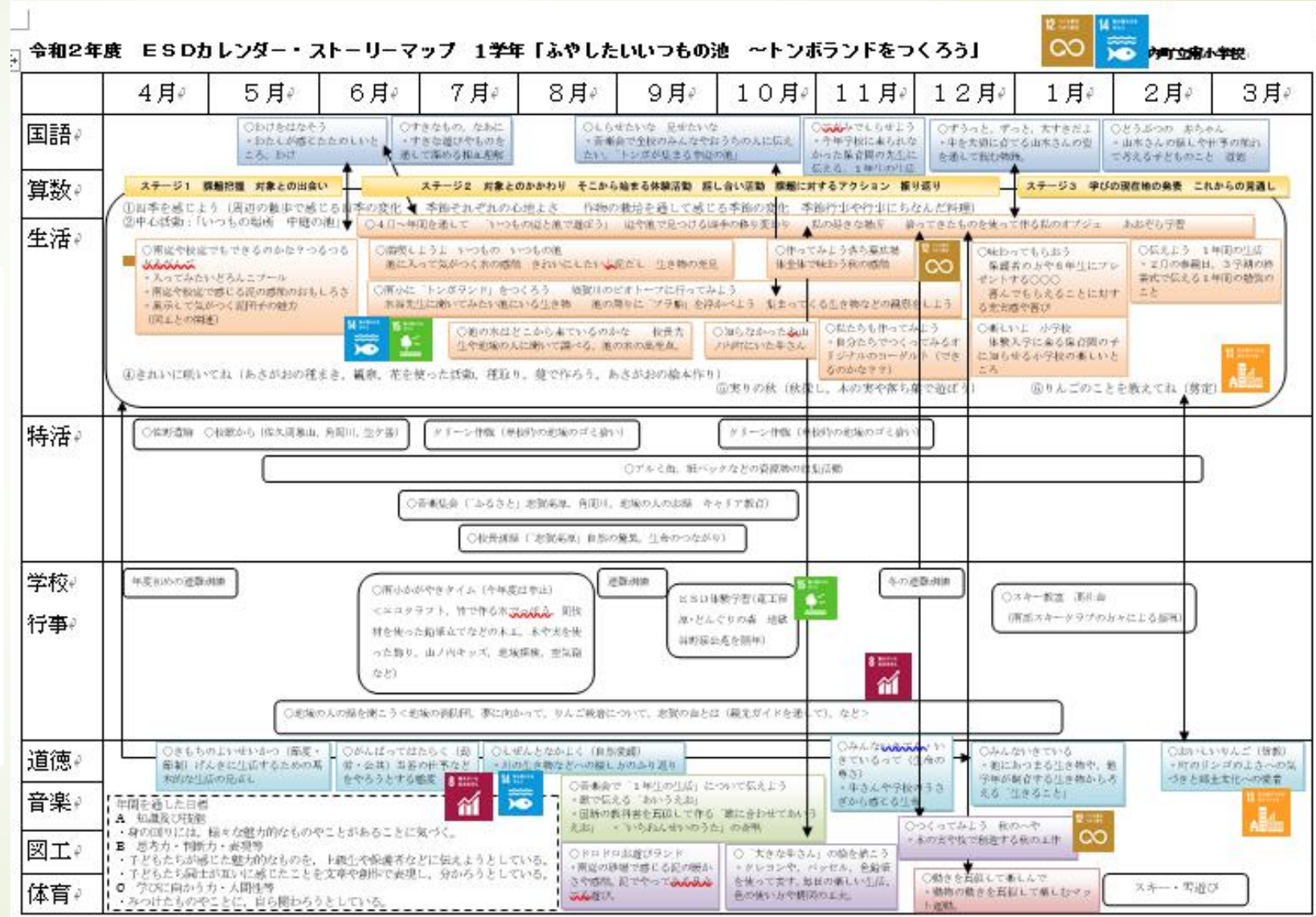


ESDカレンダーのつくり

- ・教科間のつながりが見える化
(単元ベースの教科横断化)
- ・目指す資質能力の見える化
(能力ベースの教科横断化)

作成にあたって考えていること

- ① けっしてこれに縛らずに、いくつかの道筋を描くためのものととらえる。
- ② 学期ごとを目途に更新する。
- ③ SDGs との関係をアイコンで示す。(可能な範囲で)
- ④ 年間を通した目標(つけたい力を明確化する)



SDG s と学校とをつなぐことを意識化

東京都の八名川小学校のものを参考にして、職員、子どもたちが、学習がどんなことに結びついていく可能性をもっているか、意識できるように、SDG s の17の目標と重ねてみる表を作成した。

SDG s 達成へつなぐ わたしたちの学習 南小 SDG s アクション 2020



環 境 ・ エ ネ ル ギ ー ・ 消 費			人 権 ・ 共 生			多 様 性 ・ 多 文 化 （ 異 文 化 ）					
 6 安全な水とトイレを世界中に	目標6 ↓ 安全な水とトイレを世界中に↓	 13 気候変動に具体的な対策を	目標13↓ 気候変動に具体的な対策を↓	 1 貧困をなくそう	目標1↓ 貧困をなくそう↓	 5 ジェンダー平等を實現しよう	目標5↓ ジェンダー平等を實現しよう	 9 産業と技術革新の基盤をつくろう	目標9↓ 産業と技術革新の基盤をつくろう↓		
・今年度共通テーマ「水」			・1年国「気候変動」			・今年度「男女共同参画」			・1年社会「水」		
そのように考えてやり始めたものの・・・											
まだ、あまり機能していません。											
・時間をかけて浸透させていくこと											
・職員間で折に触れて話題にすることが大切											
・常に更新するのではじめは簡単に！											
s の17の目標を大きく3つの観点で分類し記入していきます。そして、学年間のつながりが見えるようにすると共に、将来へのつながりを意識して授業を展開していきましょう！				 4 質の高い教育をみんなに↓ ・職員研修「これまでの教育活動の価値を見つめ直そう」			 8 ハイクラスな成長を達成しよう↓ ・全校「たて割り活動」↓ ・全校「交流活動（大牟田市、町行政など）」				

・職員にとって

学習の前に見通しを立てることに有効。また、学習後に実際はどうであったか振り返る材料となる。

・子どもにとって

学習の意味をとらえ直したり、未来を意識することにつながる。

研究主任・ESD 推進係の役割

① SDG s・ESDを身近に感じる
ものとする。こと。（教職員・子ども・保護者・来校者）

② ESDは新しいことを始めるの
ではなく、これまでの取り組みを
ESDの視点で「意味・価値づけ」

③ 取り組んでいることや学んだ
こと、考えたことを幅広く発信し、
未来につなぐこと。

→実践報告書を年度末に作成

記載のポイント

①量は最大でもA4で表のみ ②活動の流れの明確化 ③活用した資源・人材の記録

2019 年度 ESD 実践のまとめ

1 実施校、対象

山ノ内町立南小学校 5 学年 男子 6 名 女子 7 名 計 13 名

2 探求課題の概要、ねらい、目標

(1) 探求のテーマ「共同浴場ってどんなところなのだろう」

(2) 目 標

- ① 地域の中の温泉（共同浴場）と地域の方の健康が深く関わっていることがわかる。
- ② 共同浴場の価値について自分の考えをもつことができる。
- ③ 多様な立場や意見に気づき、それを尊重しようとしている。

(3) 探求課題の概要

5 年生の子どもたちは、これまでに町探検などで、地域の様々なものに触れてきた。そのような子どもたちにとって地域の温泉（共同浴場）は当たり前のように昔からあるもので、当然のように子どもたちの日常の風景の一部となっている。教師が 4 月に子どもたちに「町のことを教えてほしい」と言う、温泉を紹介しようとする子がたくさんいた。日常的な風景の一部であり身近な温泉は、子どもたちの意識では地域の特色と考えているようだった。そして、日常的に温泉（共同浴場）を利用する子どもも少数ではあるがいた。温泉という旅館や温泉街をイメージした教師にとって、この子どもたちの実態は驚きであり、温泉（共同浴場）は大きな魅力の詰まった場所なのではないかと思われた。

そこで、教師はまず、全員で温泉に入りに行き、温泉にかかる時間を共有したいと考えた。そこから様々なひと、もの、ことと関わる中で共同浴場の価値を見いだす活動を年間を通して行うこととした。

3 流れ（指導計画の概略）

4 月：地域巡り（上佐野方面・道の駅方面）

5 月：地域巡り（菅・寒沢方面・穂波温泉方面）

6 月：角間温泉入浴

7 月：共同浴場について探究課題を決める話し合い

9 月：穂波温泉共同浴場入浴・佐野共同浴場入浴（佐野・大日堂共同浴場の清掃活動実施）

10 月：ゲストティーチャーのお話を聞く。（地域で共同浴場を利用する方のお話を聞く。）
共同浴場に関する調査をするためのアンケート作成（児童・保護者・地域住民に実施）

11 月：アンケート結果の整理・分析

12 月：アンケート結果から考察（考察したことを学級で共有）

1 月：共同浴場についてわかった考えたことをまとめる

2 月：わかったこと、考えたことを地域に発信

4 効果、反応、所感

子どもたちは、山ノ内といえば「大自然、志賀高原・スキー場・温泉・地獄谷・りんご」など様々な魅力があることを知っていたが、「共同浴場」という新しい地域資源に気付くことができた。また、共同浴場に実際に入る体験をさせていただいたことから、その価値を実感することができた。

子どもたちは、共同浴場の学習を進めていけば進めていくほど、共同浴場のよさに気付くことができた。一方で、清掃活動や建物の維持、温泉の温度の管理など多くの課題や地域住民への負担も知ることになった。このような活動から、将来共同浴場はなくなるのではないかという考え方をもち子どもがおおくなった。現実を知ること、「共同浴場を残したい」と安易に考える子が少なく、「そうずれなよいか」より真剣に考えることができた。

5 指導方法、指導体制（活用した資源を含む）

指導に関わっていただいた人：佐野共同浴場管理者・山本さん 穂波温泉共同浴場管理者・佐藤さん
角間温泉共同浴場管理者・黒島さん



2019 年度 ESD 実践のまとめ

1 実施校、対象（人数も）

山ノ内町立南小学校 6 学年 男子 15 名 女子 6 名 計 21 名

2 探求課題の概要、ねらい、目標

(1) 探求のテーマ「これからの残したい大切な場所 夜間瀬川」

(2) 目 標 地域を巡ることで様々なひと、もの、ことと出会い、自信が住む地域を見つめ直すことでその魅力や価値を再確認することができる。

- ねらい
- ① 川に親しむ中で、川を取り巻く社会的な事象と出会い、防災や高齢化社会への対応などの社会的課題について知る。（知識、技能）
 - ② 社会的課題に対して解決するために自らができることを考え、実際に試すことができる。（思考力、判断力、表現力）
 - ③ 仲間と協力して活動し、課題の解決に向かい考え行動し続けることができる。（学び方、学びに向かう人間性）

(3) 探求課題の概要

4 月から実施していた地域巡りの中で出会った、夜間瀬川。子どもたちは、夜間瀬川で遊ぶことの楽しさに浸りこむ中で、「これからは夜間瀬川を大切にしていきたい」「夜間瀬川が幼児から高齢者まで楽しめる場になってほしい」「地域の人が集まって会話できるような場所にしたい」と願うようになった。また、「川のつくり」「堤防治いのバリアフリー」に目が向いてきた。そこで子どもたちは、社会福祉協議会、建設事務所の方との学習から疑問を解決しようとした。そして、願いの実現に向けて、町子ども議会での発表や、廃材を利用したベンチ作りを行った。

3 流れ（指導計画の概略）

4 月：地域巡り（佐野遺跡、寒沢方面）

5 月：地域巡り（横堰、立川、上佐野方面）

6 月：地域巡り（菅、戸狩方面） 6 月から GPS 機能付きカメラを持たせ、おもしろいと思ったものを撮影し、共有するようにした。（信州大学の水谷先生からの協力をいただいた）

7 月：地域巡り（穂波温泉方面）、探究課題の決めだし

9 月：川遊び（毎週 2 時間程度）、社会福祉協議会の方との堤防での車いす体験

10 月：北信建設事務所の方の話、子ども議会に向けたまとめの準備

11 月：子ども議会（学校での発表と役場での発表）

12 月：子ども議会を受けての今後の活動についての話し合い

1 月：廃材を利用したベンチ作り

2 月：廃材を利用したベンチ作り 学校への設置

4 効果、反応、所感

子どもたちは自ら考えて、試すことの大切さと楽しさを感じることができた。また、田舎で何もなかった地域に、子どもたちにとって今後も大切にしたい「魅力あるもの」があふれていることに気がついた。また、それを取り巻く社会的な事象や多くの人の存在を知り、思うがままに行かない状況とも出会うことができた。

頭の中で考えるだけでなく、実際に自ら体験し、そこから生まれた発想を大切にすることを子どもたちも教師自身も学べた学習だった。これから大人になっても、様々な形で地域を大切に子どもたちになっていくことを期待している。また、将来、どこに住んでいたとしても、それぞれの場所に魅力あふれるものがあり、それにかかわる人がいることを感じたのではないかなと思う。

5 指導方法、指導体制（活用した資源を含む）

指導に関わっていただいた人：山ノ内町福祉協議会 北信建設事務所 湯本工務店
民生児童委員の山本さん

活用した資源：夜間瀬川 地域にある史跡や石碑、石塔 車いす 廃材 など



研究主任・ESD推進係の役割②

校内研究会の推進と外部との連携

研修に参加し共有（オンラインで気軽に）

水谷先生を始めとした専門家との連携

校内研究会で各学級の様子を共有

南小CS運営委員会などを通じて地域
人材の活用

- ・「ひと」をつなぐこと
- ・「もの」や「こと」をつなぐこと
- ・周りを巻き込むこと

校内の掲示物等による子ども同士による
学習の共有 保護者，来校者との共有

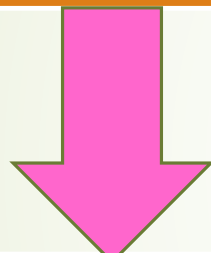


新しい試み ～学校間交流をしよう～

今年の6年生・・・

- ・修学旅行で県外の文化に触れるのも難しい。
- ・子ども議会で直接行政に学んだことを伝える機会が中止に
- ・中学校文化祭訪問も中止、合同音楽会も中止で他校の学びにふれられない。

「今年はなかなか外に出た活動はしにくいなあ・・・」
そんなところに信州ESDコンソーシアムから一つのメールが！
「福岡県大牟田市の小学校が交流校を探しています。」



「おもしろそうだし、子どもたちにとってきっと、異なる社会に暮らす同世代とのかかわりは、大切なものになりそうですね」

大牟田市教育委員会を通して学校に直接話が来ましたが、お互いにまだ動き出すことができないでいます。

それぞれの学校の学習の計画、数年後に交流が「負担」としてのしかからないかなど、不安や心配もあるというのが現実かなと思います。「交流」をどう生み出すかは課題ですが・・・

「やってみよう」という職員の意識の変化

→ そのような雰囲気は子どもたちにも伝染していくはず

職員も子どもも元気な学校でありたい！ **サステナブルな地域のサステナブルな学校を！**

発表のまとめ さらに前進させるために

- ① スタートはESDって何？何で必要なの？というところから（**学ぶ姿勢は大切に、難しくは考えず！**）
- ② 目指す子どもの姿をイメージした上で、**職員も楽しむ**学習を展開する
- ③ 研究会は日常の語り合い、実践の交換（**日常にESD**）
- ④ 参加した**実感のある研修会**の実施
- ⑤ 気軽に研修に参加し共有。（**オンライン**だからできる）
- ⑥ 周りを**巻き込むESD**を目指す（さらなる課題）
- ⑦ 実践を**積み重ね**記録する（よりよい形をさらに検討）
- ⑧ 管理職からの応援 理解
- ⑨ 学校だけで考えない。（**人材や素材の活用**）

発表のまとめ 改めて考える強みと課題

・強み

- ① 学校にとってESD, SDG s が身近なものとなってきた。
（5年ほどの時間はかかりました）
- ② 理論的なことや、最新の動向を知ることができる環境がある。
学校の取り組みに裏打ちができた。
（信州ESDコンソーシアムとの協力）

・弱み（・・・というよりは悩み）

- ▲ 中学校との接続 共通のテーマなどは置いていない。日々の情報交換は定期的にあっているかと思うが、それ以上のものが必要なのかとても迷う。
- ▲ ユネスコエコパークをさらに活用した実践の推進

おわり